

テキスト構造にみる「深淵」：「深淵の人」と張赫 宙

張, 允麿
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年

<https://doi.org/10.15017/11040>

出版情報：九大日文. 11, pp.52-69, 2008-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

テクスト構造にみる「深淵」

——「深淵の人」と張赫宙——

CHANG
YUN-HYUNG
張 允 慶

一 なぜ「深淵の人」なのか

川村湊は二〇〇三年に開かれた「韓民族文学者大会」⁽¹⁾に参加している⁽²⁾。その大会は多様な国籍や言語で文学活動をしている文学者たちが集まった大会であった。日本からは李恢成や金石範まのしげがみなども参加していた。川村は、在外国韓国人であっても作品を母国語である朝鮮語で書くことが当然だとしている韓国の民族作家会議の文学者達の風潮の中にあつて、日本語で書くことについて常に苦悩している在日の作家の位相について言及している。

この時に私は、ソ連で長い間文学研究に従事した高麗人の老文学者や、地球の裏側からやってきたブラジル移民一世の詩人と少し話をした。「一つの民族」という観念によって集まってきたと思われるそれらの文学者の考え方は、決して単純なものではなかった。また、文学者としての用

語も、それぞれ違っていた。在日の文学者たちはほとんどが日本語で作品を書いていたし、在米の文学者は英語や朝鮮語で、在欧の文学者たちは、それぞれの母語でない言語で書いている人が多かったし、中国の朝鮮族の文学者たちは民族語としての朝鮮語で書いていた。そして、ホストとしての韓国の民族作家会議の文学者たちは、韓国語で書くことを当たり前としていた。私は、今更のように在日朝鮮人文学者が「日本語」で作品を書いていることの“意味”を考えざるをえなかったのである。(中略)現在でも朝鮮総連の指導下にある作家同盟の在日の支部は、母国語としての朝鮮語で書くことを当然とし、あくまでも、「朝鮮文学」の一分岐としての「在日文学」を認めているにすぎない。⁽³⁾

川村は朝鮮民族であるならば当然朝鮮語で作品を書くべきであるという、すなわち「文学的ナシヨナリズム」が現在でも続いていることを強調している。

韓国文壇において、日本語で文学活動する在日の作家たちの評価が、作品の内容と使用する言語による、「親日」と「反日」の色分けに基づいてなされ続けているのはまぎれもない事実である。植民地時代の最も早い時期から、日本を主な活動の舞台としていた張赫宙に対する評価もまた、ナシヨナリズム的な見方に大きく影響されてきたことは言うまでもない。そして韓国でこのような評価を受けていた張は、日本でも同様な評価を受

けていた。

例えば孫才喜は、張が戦時中において、戦前におけるプロレタリア文学の性格を排除していくことで、国策的な作品を創作していると論じている⁴⁾。

しかしこのような「親日」か、「反日」か、という議論のあり方では、テクストの解釈の可能性を限定することになるのではないだろうか。論者は張に対しての今日までの評価を再考する契機を与えるのが彼の中篇小説「深淵の人」であると考え。しかし先行論文には張の「深淵の人」だけを論じているものは見当たらず、多数の作品の中の一つとして述べられているのが現状である。

任展慧は「張赫宙論」⁵⁾において、「深淵の人」を「上京後の張赫宙を考える時、見逃すことのできない大切な作品」であり、「一青年を破滅させた『深淵』が社会主義にある」⁶⁾と解釈している。任は、人道主義的な感傷から登場人物「文守用」に接近していくが、結局「生活の安定と地位」への望みを断ち切れず、「新幹会」を辞め、「運動との絶縁と小市民的生活への傾斜を宣言してはばからない」⁷⁾。「弁護士曹勲」の姿を表現することによって、作者張赫宙がデビュー当初のプロレタリア文学的な作品の世界から「訣別」しようとしていると見做している。

このように任は民族主義から離れていく作者と曹勲を重ね合わせて考察している。ここでは社会主義と民族主義が同義語として扱われているが、これは「新幹会」が当時の社会主義者と民族主義者が手を合わせた、朝鮮独立運動団体であったためだと

思われる。

このように「深淵の人」は、これまで登場人物曹勲が民族独立運動を諦めることによって自身のエゴイズムを追及することから、「親日」の傾向のある作品として論じられてきた。しかし、そうなるテクストに対する観点や登場人物の考察も「親日」というイメージに圧倒されてしまい、テクストの誤読やテクストを通じて読み取れる多くのものを見逃す恐れもある。これまで「深淵の人」を作品論やテクスト論というかたちで論じたような先行論はない。このテクストにおいて題名にもなり、なおかつ象徴的な言葉である「深淵」という一つのキーワードに焦点を合わせてみると、これまでの「親日」、「反日」という観点からのみの単純化された議論とは違った方向性が見えてくるのではなからうか。

「深淵」という言葉は『広辞苑』には場所としての「深い淵」と記されている。テクストにおいては、「深淵」という地理的な「場所」で暮らしている人として解釈されやすいが、論者は各々の登場人物における「深淵」は、心の奥底に存在しているものとして見ている。どこの国にも属することが出来ずに、「境」で迷い続ける人間の内面的苦悩が張の文学には常に現れている。「深淵」という言葉は、文守用と曹勲、それに語り手を越えた作者張赫宙にまで繋がる重要なキーワードになると思われる。本論においてはこのテクストで言う「深淵」はどこから来たのか、登場人物設定の構造とキーワード「深淵」の役割は何かということ考察したい。そのために登場人物らの

関係から、心の「深淵」を持つ登場人物の思考と行動の行方が意味するものを考察するとともに、テクストの発表当時の社会的状況と文壇の事情を検討する。それらによって、「深淵」というキーワードから、張の文学の奥底に流れている（迷い）とはいかなるものかを明らかにする。

先行論文ではいわゆる社会主義思想に重点を置いて論じられているため、テクスト中の人間像から読み取れる、「深淵」に陥る人間の行方が何を意味しているのかということ考察することがおろそかになっていると考えられる。本論の目的はテクストの深層に隠された根源的、つまり作者が直接に表現することなく伝えたいメッセージを探ることにある。

二 家庭、そして心の深淵——文守用の場合

「深淵の人」の初出は一九三六年九月発行の「文学案内」である。その後単行本『深淵の人』（赤塚書房、一九三七年四月）になり、また、『愛憎の記録』（河出書房、一九四〇年八月）にも収録されている。「文学案内」編集人、貴司山治（本名・伊藤好一）の一九三六年七月二六日の日記⁽⁸⁾から張の「深淵の人」は七月二六日以前に執筆されたと推測される。この掲載は、張赫宙が同年一〇月号から編集顧問として「文学案内」の編集に加わる契機にもなった。「深淵の人」は全知の語り手の視点で時系列的に展開するのではなく、出来事を再編成し、時間の流れとは無関係に過去に遡って語る配列方法で構成されている。文守用は

貧しい人々を弁護してくれるという弁護士曹勲の噂を聞いて何度も事務所を訪ねる。しかし、事務員から追い出されてしまい、曹に手紙を書くことになる。その手紙が冒頭部分の書簡体である。

手紙が功を奏し、ようやく曹に話を聞いてもらえるようになった文は、曹に幼いころの日記を渡して読んでもらう。ここで張は時間の遠近法を用いている。その日記には文の子供のときからの出来事や、幼い頃の思い出がエピソードごとにつづられていた。そこには父への憎しみや恨みと、家庭内でのジレンマに苦悩する文がいた。文は摘母が亡くなり、周囲からの虐めが続く日々の中で、父が自分を不愉快な眼でいつも睨みつけていると思ひ込み、自分の居場所がないことにアイデンティティの危機や不安を常にかけていた。そのため文は「自分の家庭の厭な空気」という現実からかけ離れた世界（『甘い空想』へと逃避するのであった。

森の途中にはいるとあたりは薄暗く、足元にとび散る虫や蝶もひっそりかんとして、時々長い蛇がするすると足元を通りすぎたりします。恰度森の真中あたりに小薊を二三枚ぶんの敷ける程度の広さの金芝のなだらかな丘があつてそこに枝ぶりの妙な老松が一本皆から離れて独立してゐました。私はその時分、さうでした。二十八か九だつたでせう。詩人になつて自分の限らない悲しみや苦しみを歌つてみたいと思つてゐた頃でした。私はその芝生の上に仰向け

に寝そべつて夢のやうな甘い空想を毎日々々繰り返してゐました。私の魂はふわりふわりと雲のやうに空に舞い上つたり美しい天女に抱かれたり、燦爛と輝やく花園でうつとりとしてゐました。

私の空想は遂に私の体に濃い陰を投げ与えてくれてゐた松の木にひつかゝつてしまつたのでした。私は松の木をぢつとみつめました。その老松は私の夢をすつかり吸ひとつたのです。彼女の奇怪な腕は生動して私をさし招いていました。私はその老松の一本枝に首をつらうと決心してしまつたのです。それからといふものは自分の首をその松の枝につるす為に森の中にはいつて行きました。しかし決心は容易に成功しませんでした。私は毎日老松の枝ばかりみつめて生きのびてゐたやうなものです。(二九頁)

この場面は家庭内での居場所を失つた文が母親の死後、アイデンティティの不安を表出しているところである。ここで「私はその芝生の上に仰向けに寝そべつて夢のやうな甘い空想」をするところがあるが、文の空想はなぜ「甘い空想」と表現されたのだろうか。

現実容易に溶け込めない文は自らが創りだした幻想に浸るだけで、今ある現実を直視し認めることを否定する。これは現実と夢想のずれからうまれる、孤独な人間の表象であると考えられる。渋谷治美は「過去からの絶対的な根拠づけは得られず、未来への絶対的な意味づけも得られない」^⑧人間が、二ヒリズ

ムに陥りやすいと述べているが、まさに文の自殺願望はそれを語つているのである。母が亡くなつたあとの新しい環境に慣れず、自己同一性の分裂を経験することになる。それは回顧の中で、叶えられない空想であることがわかつた上での表現になつていると言える。これは「甘い空想」が老松の木にひつかつてしまつたという表現からも読み取れる。それに続く居場所を失つた文が問題やジレンマに陥り、逃げ道の一つとして自殺をその頭に思い浮かべる場面でも、文は自分の人権を認めない現実に恨みを覚え、文自身が創造した空想の世界の中で考えをさらに歪めていつている。自殺は自己が属している現世と断絶できる望みでもあつたのである。しかし、結局父親に対する憎悪が、殺害計画とそれに続く精神錯乱状態(自分が手を下していないにもかかわらず、自分が父親を殺したという思い込み)まで招くことになる。父親は文にとつて自分を心の「深淵」に突き落とす存在である。文は父の社会的な表の顔と、家庭での陰湿な裏の顔を知ることになる。表向きは立派な人物で資産もある父は、裏では叔父の財産をすべて奪ひ取つて何人もの妾を作る男であつた。文は父に対して複雑な愛憎を覚える。父は暴力を振るい、文が幼いころから抱き続けた家庭への怨みの根源的存在であつたからだ。

「父うさんと手をつないで町を散歩し」「私を抱くと軽く打ちながら愛撫してくれるだろう」と想像する場面からは、父の愛情を痛切に渴望しているのが読み取れる。父への愛情が受け入れられず、また父から愛されない悲しみを感じつつも、内心父

は自分を「大事に思つてゐる」と「和かな愛情」を望む。文は父の愛情を追い求め続けていたのである。ある日、自身の信頼を父から認められる絶好のチャンスがやってきた。父の預金を銀行から下ろしてくるよう頼まれるのである。しかし文は今まで「家庭の厭な空気からのがれる」一つの方法として付き合つていた不良仲間からの、飲みに行こうという誘いを断り切れず、下ろしてきた父の金に手を出してしまう。しかも帰宅後金の不足を問ひ詰める父に嘘をつくことによつて、父との関係はより悪化してしまう。その理由から三・一独立運動（三二万歳運動）に連座し二年間監獄に投獄された文は後に秘密結社（独立運動と推測）に参加し、その資金を父に無心する。しかしそれを断られた文は父への殺意を固める。

文は父への愛情が裏切られたと思ひ込む。このころから文は父親を殺したいと思ひ続けていた。人は生まれるときに自ら望んで生まれるわけではなく、本人の意思とは無関係に生まれた身分と家庭を一生背負つて生きていかなければならない。それは家庭の範囲を超える国やその歴史の場合も同様である。

文は、父に愛されないことを悟つた悲しみを、父への殺意と自身の自殺願望に置き換えようとしていた。父に対する憎悪を抱いたまま殺害計画を実行しようとするが、訪れた部屋にはすでに殺害された父の姿があった。文は警察から殺人の疑いかけられる。現実の世界での不幸の原因を自身から除去することで幸せになれると信じきつていた文は、殺人計画を実行できなかったことで精神錯乱状態に陥る。文と父親の露骨な嫌悪の関係

は、理想と現実の不安や葛藤として象徴されていると言えよう。その混沌の中で、自殺する勇氣もなく、計画通りに父親の殺害も自分で実行することができなかったことから「李」という仲間の裏切りから人間への不信感を抱いたまま「精神錯乱状態に陥り、尊属殺人の容疑を認める自虐的行動を起こすまでになる。ここでの精神錯乱は現実からの脱出口として描かれている。それは友人である李に裏切られた文が親殺しのぬれ衣を着せられ、人生の長い期間を刑務所と精神病院で過ごす展開にも繋がる。「李」という人物には、人間社会への不信感が托されているとも言える。

「私は父が殺されたのを知つた瞬間には何だかこう百年も長生きしさうな晴々とした心持でした。」（二八頁）という文の言葉から読み取れるように、父の死を確認した文は、父親が亡くなつた事実を客観的にみようとしているように表現されている。文を苦しめる家庭環境での不幸と因果関係にある父、その父を殺そうとする行為は、すなわち文自身がおかれている現実を否定し、破壊しようとするものである。そして文はその存在を消すことによつて現実を破壊しようと考えたのである。文にとつて現実が破壊されるということは、自分の苦悩が消え自由になれることに繋がる。

極めて自己中心的な人間は、周りのすべてのものか思い通りに動かない、受け入れてもらえないということから、それを自分の最大の悲劇と思ひ込む。周りのすべてを自身に対して恐怖と不安を与える存在と捉え、属している現実世界を否定し、生

きることに對しても無意味であると思ひ、自殺を考へる。また、現在の状況から抜け出そうとし、必然的に自身の悲劇を自ら深めていく。その上、文は自分が父を殺したという錯覚に陥り、警察に虚偽陳述をするという病的な自虐性によつて服役をすることになる。

しかし文は「拘禁性精神病」といふ病によつて、その不幸な状態から逃げ出すことが出来た。言い換えれば現実と夢想との混沌から逃れ、ささやかな自由を得たのである。

文は曹勲との出会いで現実に戻りつつあつたが、乞食に戻つて子供たちと遊んでいる方が楽しそうに見える。曹の助けで現実への復帰を試みるが、すぐに逃げ出してしまふ。

ここで一つのエピソードに注目したい。汚い格好で酒場に来た文は、金銭トラブルに巻き込まれた飲み屋の女を、曹からまたま与えられた金で救つてやろうとするが、盗んだ金だと唾をかけられるのである。このエピソードは、社会の偏見と差別がどれほど冷酷なものを物語つてゐる。つまり中身は同じ人間でも、社会に受け入れられない異形の者は排斥されるという現実社会を象徴してゐるのである。

文は身柄を預けられた曹の親戚の家から抜け出して、懐かしい郷里を訪ねる。庶母は文を表面上は温かく迎えてくれる。しかし亡き父の遺産を要求されることを恐れた庶母は、文を再び精神病院に刑務所に入れさせようと画策する。その企みを知つた文は再び人間不信に陥り、刑務所に入れられる。曹は再び収監された文に面会に行く。文はその刑務所で、父を殺した真犯

人が黒山であると知つてゐる李緑山という男が、他の罪ですでに処刑されたことを聞く。

あゝ、ぢや私は助からないんですね。(五八頁)

自分の無実を証明できる唯一の人間李緑山の死を告げられた文は、ありのままの現実(「運命」)を受け入れる。そのような文の姿を最後に物語は終わる。それは文がわずかに残つた希望を捨て、ひとつの人生の終焉という運命を率直に受け入れた瞬間であつた。そしてそれは「虚無の深淵」を誠実に現実として認めること、すなわち絶望からはついに回復できないものと認め、そのすべての婦結の責任を自らが負うことであり、それによつて自己をかううじて存在せしめていたすべての消失を感じた瞬間でもあつた。

出所してから数年後、曹の眼を通して乞食になつた文が語られてゐる。家族からも民族からも自由になり、子供達と無邪気に遊ぶ乞食姿の文は、周囲から「白痴」、「乞食」といじめられ蔑まれながらもかえつて幸せに見える。それは自殺という極端な選択ではないが、現実から自由になれた、本来文が望んでいた姿、たとへば考へられる。人生に拘泥しないという意味では運命が受容されてゐる。

曹は、このような自滅していく文を觀察してゐる傍観者である。そして在るものを在るがままに受け入れるという、現実に對して誠実な「個人主義」的人生觀の持ち主である曹は、作者

張が望む理想の人物として描かれている。

三 救国の戦い、そして心の深淵——曹勳の場合

曹勳は朝鮮に実在した独立運動の為の新幹会（一九二七年二月設立、一九三一年五月）⁽¹⁰⁾という組織の幹事であり、弁護士という設定である。曹は文が苛酷な現実から抜け出すには「乞食」も悪くないと思ひ、文の弁護と独立運動に距離をおくこととなる。張赫甫が言う「利他」と「利己」⁽¹¹⁾を兼ね備えた「個人主義」的な曹は、作者を想起させる人物として描かれている。曹をこのような人物として登場させたことからは、作者の意図と、二ヒリスティックな思想を確認することができると思われる。

従来、新幹会の幹事であることから曹は社会主義者と捉えられているが、この解釈が成立するとは考えにくい。新幹会の幹事イコール民族主義者と捉えた方が自然ではないだろうか。

曹が文から渡された作文には、幼い頃に刻まれた家庭内のトラウマから抜け出そうとする文の葛藤が描かれていた。曹はその作文を読んでいくことによって、自身の葛藤を見出ししている。

これは俺の中学二年のときの作文なんだ。俺は今でもこれは傑作だと思つてゐる、俺が書いたものでこれ程うまく俺の心相を描いたものはない。

だのに、先生の奴、これはあまりにひねくれてゐていか

んとぬかしやがつたつて。

曹勳は思はず涙ぐんでしまつた。彼はこの見すばらしい男とは似もつかない可憐な少年を眼の前に描いた。純真な少年のあどけない姿だ。そのいぢらしい様子がすつかり見えるやうだつた。だが、その無垢な少年はこの目の前の男になつてしまつたのだ。周囲の諸々の事情に蝕まれてこのやうに変つたのだ。それは自然の暴威だろうか？（三四頁）

初め曹は「同情や好奇心」で文の行動を観察・分析する人物として登場していた。しかし曹はこの作文を読み、「思はず涙ぐんでしま」い、次第に文を助けようと様々な方法を模索することになる。

曹の涙は曹が文の家庭の「深淵」と、今は祖国を失ひ独立運動をせざるを得ないような状況に置かれている自分の悲しみを重ね、さらに人間の救いようなない業という「深淵」をも重ね見たからである。

曹は事務所や親戚の家を逃げ出し、道端で子供たちと楽しく遊ぶ文の異常な行動を眼にしながらも、現実に対して傍観的態度をとり、失望と諦めから最後まで積極的に文の面倒を見ることが出来ない。この曹の眼を通して確認される文の姿は何を意味するのか。文は乞食の身分でありながら飲み屋の女を助けようとしたために、道端に投げ出される。曹はそのような文を観察することで、文の姿から自分の「深淵」に気づかされるという相互影響関係におかれることになる。

吾々が吾々の民族解放運動に身を投げ入れた当初は、吾々は民族の中に自分自身をも包含させて共に救はれたいと念じてゐたのだが、今日私達は自分といふことを民族とは別にして、民族を救ふといふことになつてゐるのではなからうか。いや、さうなのだ。民族は……⁽¹²⁾であつても吾々自身は特等席にゐるのだ。民族は困つてゐても吾々自身は何も困ることはないか。この個人の幸福は吾々の運動を客観的狀態に置いて考へ、恰も他人の不幸のやうに感ずるやうになつたのだ。私がこの文といふ勇を救はうと思つたのと全く同様の心理なのだ。吾々の運動はもう成功は出来まい。共産主義者の攻撃をうけても仕方がないのだ。吾々運動の主体をなしてゐるものは多かれ少かれ私と同様の人間が多いのだ。私に文を救はうといふ熱が段々とさめたやうにさめてしまふ人間ばかりだ。(五四頁)

この引用文は曹が仲間に書いた手紙の内容である。初出の『深淵の人』と単行本『深淵の人』の異同には大きな訂正や削除はないが、右の引用文は『愛憎の記録』に収められた際に全部削除されている。一九三七年に日中戦争が始まつた日本において、言論統制がより厳しくなつたのは周知の事実である。戦時中、植民地朝鮮の独立運動や共産主義に関する言説が民衆に刺激を与えることは、注意深く避けられていた⁽³⁾。

ここで『愛憎の記録』における削除が、どのような意味をも

たらしているのか考察していききたい。その理由としてまず当時の検閲制度が挙げられる。

『愛憎の記録』が発行されたのは一九四〇年であり、戦時中の言論統制が益々激しくなる時期でもあつた。例えば、初出の三九頁に記された約九〇〇字の文の言葉も『愛憎の記録』では削除されている。それはその内容が三一独立運動に参加する文に民族独立の気運を語つたものであつたためであると思われる⁽⁴⁾。

しかし、先の引用文が削除されたことについて、別の理由の可能性を考察してみたい。削除される前において曹は、「深淵」に陥る文の姿に自らの理想と現実の決裂を重ね、そこから独立運動が成功出来ないと考え、国家意識や独立運動を「他人の不幸」のように思い、エゴイズムへの道を歩むことを決心するといった人物になつてゐる。しかし、前述の引用文が削除されたことによつて、曹勲はただ単に文を観察する人物として表現されており、独立運動から身を引いた姿は描かれていない。

朝鮮内の独立運動や反政府運動に言及することは、雑誌「文学案内」の傾向に合わせる為であろう。一方で、『愛憎の記録』においては文の父親に対しての愛憎を強調する必要があつたと思われる。このことからこの削除について二つの理由が考えられる。第一は一九三七年の日中戦争が始まつてから、さらに厳しくなりつつある検閲制度が、削除された部分の表現を許さなかつたということ。第二は人間がもつ多様な愛憎をモチーフにした『愛憎の記録』の性格を考え、文の語り口に重点をおいた

ということである。

曹は民族独立運動、すなわち国家規模の人物という存在から個人主義的な人物に変貌していく。これは国家や民族ということより、張にとつていかに個人的現実が重要視されていたかを物語っている。曹の心の「深淵」は、好意から女を助けようとして道端に投げ捨てられる文をどうしても救えない自分を確認したことから、国のために戦う資格など自分にあるのだろうかとの疑問を抱いたところにある。そして、植民地となっている自国の独立のために積極的に抵抗しなければならぬにもかかわらず、曹は先が見えない朝鮮独立運動に同調できなかった。曹は文の心の「深淵」に触れることによつて、自分の心の「深淵」に気づき、独立運動を諦めることになつた。それは曹が祖国の独立を望まないからではなく、強く希望しているからこそ起る理想と現実との決裂であり、その破け目に曹の「深淵」がある。ゆえに曹もそれが自分の運命だと受け入れ、エゴイズム的人間になつていくのであつた。

四 張赫宙の日本文壇への憧憬と蹉跌

新しい環境に慣れない文は自己同一性の分裂を経験することになる。それは回顧の中で、叶えられない空想であることがわかつた上での表現になつている。これは「甘い空想」が「老松」の木にひつかかつてしまったという表現からも読み取れる。文にとつて自分がどうあるべきかという、理想と現実のギャップ

から生じる強いアイデンティティの不安が心の「深淵」を表面に出している。家庭の「深淵」の象徴である父親は、また文のアイデンティティの不安の根源的な存在でもある。文はそこから眼をそらすために自殺を妄想し、さらに父親の殺害を計画する。

そのような文を観察しながら曹も独立運動の理想と現実という「深淵」に陥り、エゴイズムへの道を選ぶのである。この「深淵」は作者張赫宙にも繋がっていく。このテクストは日本文壇での活躍を夢見ていたことが、現実的には思うようには認められなかつた張を象徴していると思われる。このことは張の文学に現れる不安と「深淵」の芽でもあつた。

張もまた家庭から逃げ出したいと思つて続けた。さらに、幼い頃親友の背徳的な裏切りに大きな衝撃を受けたこともあつた。張の幼いころの苦悩は自伝的小説以外にも、張の小説のモチーフとして度々挿入されてきた。張は生母と別れ、父と嫡母の下で中学時代を送ることになつた。軍人を辞め地主となつた父と嫡母は、農民や小作農の人々に敵しく当たる。張はそんな二人の姿に反発心を抱きながらも、生活のために二人に依存せざるを得ないという自らの状況に対する葛藤が絶えなかつた。

張は庶子である自分の不安定さを感じながらも、当時としては比較的恵まれた生活を与えてくれる両親を、非難し否定しきることができなかつた。それは青年時代の朝鮮と日本において一時期染まりかけた、共産主義や無政府主義運動に結局は飛び込めなかつたことから分かる。そこにこの作者特有の思想や生きざまが感じられる。作者のアイデンティティが隠し持つてい

る闇が、このテキストの物語の世界に秘められていると考えられる。

「深淵の人」が掲載された「文学案内」の購買層は、またいわゆるブルーカラーと呼ばれた労働者たちが多く、したがって読者に左翼運動者らが多く存在していたと思われる⁽⁵⁾。文学案内社の編集者や読者に本テキストはどのように読まれたのだろうか。独立運動の理想と現実の決裂に悩む曹の設定はより広い範囲の人間の苦悩、すなわち当時の日本で弾圧される左翼団体のそれとも通じていると考えられる。「深淵」という言葉が、張と登場人物だけではなく読者にまで繋がっていくのである。

日本に定住する前、張は一九三五年一〇月、「千里」誌上に「文壇のペスト菌」を投稿している。「文壇のペスト菌」とは、朝鮮文壇についての所感を書いた読者の手紙を紹介する文章である⁽⁶⁾。張はこの手紙を通じて、自分の日本語での創作が朝鮮語で書かれていないという理由から朝鮮文学とは認められないという人々の批判に抗議する。これは当時、朝鮮文壇の柱である保守派の人たち、つまり自分たちの位置を守るため、新しいものを受け入れようとしない人々に挑戦状を投げつけるような内容であった。

この文章を発表した後の朝鮮文壇の反応は誰もが容易に想像できるものであった。「文壇のペスト菌」に対して李無影は「東亜日報」⁽⁷⁾に五回にわたって反論を行っている。また金文輯はそのような文章を書くことで朝鮮文壇のプライドに傷がつき、政治的逆効果を及ぼすことを悟らなければならぬと非難して

いる⁽⁸⁾。

また張は東京に定住した後、「東京へ来て虚無を感じる」⁽⁹⁾という題名をつけたエッセイを残している。張は二・二六事件直後においても東京がいつもの東京であることに驚いている。それは表面的には何も変わらぬ様子の市民たちの間に、虚無感を見出したからである。張はそのような東京の様子に落ち着かない気持ちを吐露し、これからの文学の方向性について迷い続けた。それは次の文でも確認できる。

そこで、(一九三六年当時―論者注) 私は上京しました。諸々の破綻を背負ひ、けれど希望を抱いて東京へやつてきました。ところが、東京は、私の頭を真暗にしてみました。それまで私の性格や才能やある程度の論理を結へてゐた糸がぶつたりとぎれてしまひました。随分酷い性格に変わつてゆきさうでした。何のこともない、山猿が都の真中へおつぱり出された形で、回想すると、今も顔が根らむほどです。⁽¹⁰⁾

この文章を、作品が書かれた当時の文壇に照らしつつ考えてみると、張が日本文壇に抱いた希望は叶えられなかつたことがわかる。「文学案内」第二巻一号(一九三六年一月)の「朝鮮台湾中国新説作家集について」(編集局執筆 九三頁)では次のように述べられている。

朝鮮の張赫宙氏については、氏自身、「自分は日本文壇

の人間であつて、朝鮮文壇の代表者ではないのです」と謙遜し自分が翻訳して推薦するとまで奔走してくれたのであるが、そしてまた、張君の意見に従うべきであつたが、時間的に余猶がなかつたし、また、われわれとしては、朝鮮出身の作家が朝鮮を題材にして創作する張氏は立派な朝鮮の代表的な作家の人であると思ふので、張氏には大変気の毒であるが、この集に加はつて貰つたわけである。

ここからは張自身の意見と「文学案内」誌とのずれが見られる。このことは日本文壇で夢見てきたような作家活動が許されなかつた張が「文学は朝鮮作家の少い時期に朝鮮を描き、朝鮮について日本に紹介をしたといふ点に文学的位置と使命を有してゐた」という不本意な評価を与えられることにも繋がつていく。

日本でも自分の思い通りの創作活動が出来ない張は、様々な方面からの要求に迎合して書くしかないことを悩んでいた。これが「深淵の人」が生まれる背景ともいえる。

日本文壇においては朝鮮人作家張赫宙の越えられない壁があった。植民地出身作家として、作家自身が夢見てきたような作家活動が許されなかつた。あくまでも日本文壇が要求するままに書くことでしか創作活動が出来なかつた。その上二・二六事件を境に日本文壇への検閲は日々厳しくなる。このような状況下で、張は進むべき文学の方向性について悩み、その切迫感を「深淵の人」に託していると思われる。ここで、当時「文芸

首都」と並んで、張の日本文壇の主な活動舞台になつた「文学案内」という雑誌について考察することで、張の日本定住後の状況をさらに明らかにしたい。

「文学案内」は一九三五年七月、編集者貴司山治が「働くものの立場に立つ文学——勤労大衆に愛され、親しまれ、理解され、その生活の友となり、向上発展の歯車となる文学が創り出されなければならない」（創刊の挨拶）として創刊した左翼雑誌である。⁽²³⁾

貴司山治はコップ（日本プロレタリア作家同盟）の中でプロレタリア大衆小説を書く特異な存在であり、一九三二年検挙された後転向はしたものの、労働者のための雑誌である「文学案内」を創刊している。貴司の日記からみると、二・二六事件当日の午後、遅く出勤してきた貴司は、軽く考えていた事件の実情がことのほか深刻なことに気付き、今後雑誌に対する軍部の検閲や弾圧が厳しくなることを憂慮していることがわかる。⁽²⁵⁾ 二六日と二七日二日間の貴司の日記からは二・二六事件発生と、プロレタリア作家たちの活動を支援していた文学案内社の緊迫感が読み取れる。

さらに日記には一九三六年七月一六日に貴司と張が初めて会つたことが記されている。その後張は頻りに文学案内社に入り、七月二四日には張の歓迎会が銀座のレストランで盛大に開かれており、その様子を記した日記に、貴司は当時の朝鮮人に対する私見を書いているが、その中でも張に対しては比較的寛大な気持ちで接していたことが分かる。⁽²⁶⁾

ただし張に対して自分たちと同等の一人の作家としてではなく、やはり異民族である朝鮮人として接していることもその日記から読み取れる。朝鮮人作家が日本の文学界で入選したことで、日本文壇に受容されることを些か違った意味で捉えていることもこの文章から窺うことができる。そして貴司は突然「文学案内」の編集方針を変更する。

創刊号以来の「働く大衆の文学の実現を！」といふ主張を実践するために過去の一年間の成果を批判した上で第二年目からは、これまでの固定化した教科書的、啓蒙的編集方針を改めて、生きて動いている文学上の問題を批判的に取り上げる方針に決めました。⁽²⁷⁾

このように、左翼思想を基にしていた方針から方向転換していることがわかる。これは単に一周年を迎えたからではない。ナウカ社の大竹が逮捕されたこともあり、出版界に対する政府の監視の眼を意識して、貴司と丸山義二（貴司とともに文学案内の編集を担当していた）が決めたことである。現実には文学案内社は二・二六事件後の四月号から厳しい検閲を受けなければならなかった。それは『言論統制文献資料集成』（二巻、前掲）に記されているように「二・二六事件（昭和二年二月二六日勃発）については問題がある。当時閣議に於いては此の事件は「事変」として取扱はないことに決定したので、東京刑事地方裁判所に於ては之を「事変」と解釈して其の際の造言飛語を軍

刑法によつて処罰した例がある」程、厳しく扱われていたのがわかる。張はこの時期を「文学の混乱」期と表現している。貴司はその後雑誌の内容に非常な注意を払いながら編集に臨んでいたが、遂に第二巻第七号において方針変更を宣言した。このことから左翼派作家である中野重治が交友をやめ、徳永直も雑誌の編集顧問を辞めることになった。この一件が象徴するように、二・二六事件以降出版界は厳しい検閲を受けるようになり、それまでのような文学活動は禁じられることになる。

言論統制が厳しくなる一方、植民地に対する差別が「内鮮一体」の同化政策にもかかわらず、解消することがないという日本の状況は、日本文壇の事情を通して張自身に歴史的「深淵」をさらに感じさせたのではなからうか。それは日本にいる「文学案内」の読者にまで影響を及ぼしているとも考えられる。「文学案内」は二・二六事件以降、それまでのプロレタリア文学志向の強かった編集姿勢を一転させ、芸術志向を宣言した。それは初出での曹勲が独立運動から身を引く場面と、「文学案内」の新しい方向性が合致したということである。

「深淵の人」において、文守用と曹勲二人の関係は常に曹を通して文が語られる構造になっている。さらにその二人の登場人物を語り手が語っている。つまりテキスト全体が三重構造になっていると言える。「深淵」というキーワードはこの三重構造において文から曹を、文と曹から語り手を、さらにこのテキストから作者張をつなげていく。

五 結論

新しい文学的方向性を目指そうとしていた張は、しかし過去の連続性を絶ち切れず、ニヒリスティックな無力感を絶えずその胸中に抱いていた。文守用と曹勲という、同じ時代を、しかしそれぞれ違った環境の中で生きていく二人が、逆らうことの出来ない運命を歩んでいく。それは一人の作家が歴史の中を歩む上での信条であったといえる。そしてまた、そうせざるを得ない時代であったともいえる。文の家庭における「深淵」と曹勲の救国の戦いにおける「深淵」を繋げることで「深淵」というキーワードが家庭から国へと範囲を広げていく。それは作家張にとつての現実から感じられる「深淵」の表象であったと考えられる。当時としては反体制組織とも言える新幹会の幹事をしつつ、現実を直視し逞しく生きようとする曹勲と、多くの悩みを抱えつつも一片の欲望さえ見出せず結果的には乞食としてしか生き得なかつた文守用という、二人の人物が描かれている。両者の内面に流れる現実との衝突から生まれる「深淵」の人間像は、張の日本文壇での活動から味わつた虚無感と重なっているといえる。

ニーチェの言葉、「お前が永いあいだ深淵をのぞきこんでいれば、深淵もまたお前をのぞきこむ」⁽³⁰⁾のように、文は父との葛藤の解決を殺害という形に求めたことによつて、二度と浮かび上がることはない「深淵」に陥つていったのである。「深淵」に自ら嵌つていく自虐的な結末を、曹勲は文を通じて覗き込ん

だ。他者の「深淵」に触れようとするものは、また必然的に自己の「深淵」に気づかされ、そしてあるときは自己嫌悪と絶望に陥ることになる。

現実社会は張に、文のような生きざまに対して共感と自身の運命を見いだすことを強いた。そして張自身にとつて心の「深淵」は、現実に対して絶望を感じるこの表現であり、また、運命を受け入れるしかないという諦念の表現でもある。そして流されるままに身をまかせるといふ自暴自棄、あるいは自虐的な諦観を描いた。これは文、曹、そして張の三者に共通する観念であり、張は日本文壇への憧れを抱きつつも高い壁を実感する。そしてこの「深淵の人」というテキストは、張が日本文壇に要求される朝鮮人としての文学活動をするしかない現実を受け入れることを暗示している。張はどこかに絆を求めている思いが熱烈であつたために挫折し、また連帯への思考が強かつたために、その対象を日本文壇に協力することで求めていったのである。それは多くの国策作品を創作するという行為に結実していった。

[注記]

1 二〇〇三年九月三日〜四日に「한민족 포럼 韓民族文学フォーラム」が開催された。「제3회 한민족 문화 공동대회 9월 서울에서 개최(第三回韓民族文化共同体大会九月ソウルにて開催)」(한인 네트워크(韓人ネットワーク)二〇〇三年七月号、八月号)参照。

また「文学を通して韓民族の共通性を求める」(在外同胞財団報道記事、

二〇〇三年八月二日「<http://www.okf.or.kr/bbs/bbs.jsp?b1ID=media&code=W&ID=1075>」には、次のように記されている。「디아스포라와 아이덴티티 그리고, 문화」이란 주제로 이틀간 진행될 이번 행사에는 고리키문학대학출신이며, 자신의 플랫폼트〈켄타우로스의 마음〉등을 집필한 러시아 한인 3세 아나톨리 김, 고령에도 불구하고 현재까지 일본 문단에서 왕성하게 활동중인 재일 한국인 작가 이희성, 버클리 대 아시아·아메리카 연구교수인 미국의 일레인 김, 중국에서 활동중인 김학천 등이 발제자로 참석할 예정」(「디아스포라とアイデンティティ,そして文学」というテーマで、二日間行われる今回のフォーラムにはコリキ文学大学の出身でありながら神のフルト、ヘケンタウロウスの町などを執筆した在ロシア韓国入三世のアナトルリ金、高齢にもかかわらず現在も日本文壇で活発に活動をしている李恢成、パークリ大学でアジア・アメリカ研究教授の在米韓国人のアレイン金、中国で活動している金学泉等が提案者として参加する予定―論者訳)

2 「分断から離散へ―「在日朝鮮人文学」(「社会文学」二六号、二〇〇七年六月)二五頁

3 前掲「分断から離散へ―「在日朝鮮人文学」二六頁―二七頁

4 孫才喜「張赫宙文学における連続と非連続」(E・クロッペンシュタイン、鈴木貞美編『日本文化の連続性と非連続性』、勉誠出版、二〇〇五年一月)一四一頁―一八〇頁。ただしこの孫の論文に関しては、いくつかの点について基本的な誤りがあると思われるので、ここで指摘しておきたい。

孫は、戦中・戦後における張赫宙文学について、戦時中の作品には日本の国策が積極的に反映され、戦後の作品とは異なる様相を呈している

という意味での非連続性を指摘する一方で、作中人物におけるプロレタリア文学の性格を排除していく作品傾向から戦後との連続性を見ることが可能であると述べている。

しかし、孫の戦中・戦後の連続性に関する指摘、すなわちプロレタリア文学の性格を排除していく作品傾向があるという考えには同意できない。例えば自伝的性格を持つている『遍歴の調書』(新潮社、一九五四年二月)において、作中人物の「私」は反政府運動が原因で、私服刑事の手を逃れ長野県に移り住む人物設定になっている。そもそも、孫が言うようにすべての作中人物のイデオロギーが排除されたとは考えられない。

戦後において張はアナキスト新聞「平民新聞」に一九四六年八月七日から一九四七年四月三〇日まで一九回にわたって、「意中の人」を投稿しており、張の文学の中でイデオロギーが排除されたという指摘は正確ではないものと思われる。朝鮮戦争を扱う作品の中にも、異なる思想の下で戦う朝鮮民族が描かれており、他にも同じような例を挙げることができる。

また「深淵の人」を論じた部分には、誤読と思われる箇所がある。

主人公守用は父親の殺人容疑で逮捕後刑務所に入れられ、拘禁性精神病に陥り、精神病院に移された際に逃げ出して乞食生活を始める。文守用は弁護士曹の曹勲を事務所にあずねるが、何度も事務所の事務員に追い出されたため手紙を書く。その手紙の内容が曹に読まれるところからこの作品は始まる。孫は、この作品の冒頭について、「社会主義運動に参加した理由で刑務所に入れられた文守用が、弁護士の曹勲宛に助けを求める手紙を送る。」と述べている。しかし文は、三・一独立運動で刑務所に入れられたことはあるが、手紙を書いている時点は、殺人容疑で投獄

された後に、移送された精神病院から逃げて乞食でいるときである。

また、もう一箇所「一九一九年の三・一五歳運動で文に死刑が言い渡され投獄されてから」というところなども、作品自体の内容を正確に把握しているとは思われない。孫は結論を社会主義にひきつけるあまり、多くの誤読を犯しているものと思われる。

ここでは家庭内不和の突破口のエピソードとして、三・一独立運動が挿入されている。孫は「一九一九年の三・一五歳運動で文に死刑が言い渡され投獄されてから、約一八年が経過」したと述べているが、なぜ「一八年」であるかが正確に述べられていない。本文の曹黙と継母の言葉には、父の殺人事件後、文が逮捕されてから約二十年経過したとあり、一八年と断定されていない。

5 任展慧「張赫宙論」(『文学』、一九六五年二月)八四頁〜九八頁

6 前掲「張赫宙論」八八頁

7 前掲「張赫宙論」八八頁

8 浦西和彦「貴司山治『日記』一九三六年(昭和十一年)」(三)『国文学』第八五号、二〇〇二年(二月)五三頁

七月二六日の日記には「家で文学案内九月号の原稿の編輯」と記されていることから推測できる。

9 『逆説のニヒリズム』(花伝社、一九九四年二月)六六頁

10 一九二〇年代、在日留学生らによって朝鮮に社会主義思想が持ち込まれ、当初は社会主義運動と共に民族主義運動に活気をもたらした。しかし独立運動においてそれぞれが別の団体を結成し、闘争方法や運動の方向性の違いから、お互いの非難合戦に発展し、対立的な関係におかれていった。この分裂状況を「独立」という同一の目標を基に、共同の団体とし

て再結成されたのが「新幹会」である。しかし、一九二九年一月光州学生運動で日本の弾圧に抗議したことで、幹部を含む四四人が逮捕され、うち四人が実刑判決を受けた。この事件から組織内部は揺れはじめ、両者の譲らない思想的対立へと発展した。後に、民族主義運動側が主導権を手にしたことが原因となり、わずか四年あまりで「新幹会」は解散した。

11 「以来作者は作者の「利他」と「利己」の板挟みになって苦しみおしました。ある時は物凄く「利他」に傾いたかと思ふと、すぐに又極端の「利己」に立ち返るのです。かうしたことは、もつとほかに作者の生立ちと複雑な関係があるのであつて、かういふ風に簡単に言つてのけてはならないはずですが、要するに、作者の「利他」と「利己」とを適当に折衷して、「個人主義」的的人生観を確立するまでには相当ながい年月がかつてゐるのです。(中略) 作者は個人主義的的人生観を獲得する前に「利他」と「利己」の板挟みになって苦しんだやうに、かうした社会の「醜悪」に腹を立て、憎悪し、そして闘つたりして人間の社会に我利々々が幅をきかすのかと悩みましたが、そんな馬鹿気た悩みも当時の作者(青少年時代)にとつては殆ど人生の全部たつたのです。」(創作ノート「田園の雷鳴」について)『田園の雷鳴』、洛陽書院、一九四〇年一月)三二二頁〜三三三頁

12 伏字。初出「深淵の人」には多くの伏字がみられる。

13 「戦時に於ける言論統制の重要性」(『言論統制文献資料集』一巻、日本図書センター、一九九二年二月)参照。

14 「小国家がいくつも出来たこと、朝鮮民族も当然……………さないうならばその望も……………」

駄目になることをくどくどと話しました。私が日本がそれを承知する筈がないと主張しても彼は欧米諸強国がそうなら皆で………
………だといつて………の大体の様子を私に説いてくれました。上海に………のあつたこともその時始めて知つたやうなものでした。

私は吾々民族の間にそういふ雰囲気が意外にも濃厚なのを段々と知るやうになりました。或る日を期して半島の隅こまでにも………
………したことを知りました。学校でも生徒達は授業などに全然気はなく………になりました。寄るとさはるとこのことをこそこそと話し合ひました。………です。あれも皆生徒達の手によつて幾百本となく刷つてこしらへました。遂に私もその雰囲気に包まれてしまひました。どうせ死ぬなら死甲斐ある死場所を求めろ、と自分に囁きました。私は意味のない自殺計画をひどく恥ぢました。

三月一日です。大都会では………とこそろが、どうしたことか私達の邑ではそれが始まらないんです。私は皆が臆病になつたのではないかと焦々してたんです。しかし………
………ました。二日遅れた市日の日、市場に人が出盛つた頃、私達の一団と青年と壮年の集団が………
私はそのときの光景を到底その通りには申し上げられません。はい。さうでせうとも。先生もむろんおやりになつたでせう。ものの十分もたたないうちにどこからとなく………
どこにどう………。群衆の間には………
………が現れました。………引つたてられる者。まるで………
。私は二三の友達と一しよに家々の土塀を乗り越え屋根伝ひに遠くへ逃げ延びました。只本能的にさうしただけでした。臆病になつたのでも

何でもなかつたのです。

しかし、私は捕へえられて二年間獄舎に繋がれる身となつたんです。私………ばかりでした。(初出三頁)

15 「文学案内」には読者投稿欄の「アンテナ」が設けられていて、投稿する多くの読者が労働者であることが確認出来る。

16 「朝鮮に文学の天才が出ることを楽しみにしている一人であるからです。(中略) そのような天才が生まれるとしても彼らを育てるところが蹴つたり、踏んだり、唾を吐きそうな毒素が満ちているのではないかと疑問と恐怖が感じられます。(中略) 朝鮮人として英語で、あるいは中国語で、エスペラント語で、その他何語でも文学をするのに何の関係もない、その作品の優秀性だけを賛美したり、憎悪したりすればいいのではないのでしょうか。(中略) 文学において猜忌と憎悪のこの二つはわずかな取極でさえもなく、文学のペスト菌と言わざるを得ないのです。」(論者訳)

17 李無影 「文壇のペスト菌」の再検討」(「東亜日報」、一九三七年一〇月一七日、一九日、二二日、二四日)

18 金文輯 「朝鮮文壇の特殊性」(「新潮」三三卷二号、一九三六年二月) 一五五頁

19 「文学案内」第二卷六号、一九三六年八月、三三三頁。その前に同じ内容で一九三六年七月一四日の「京城日報」朝刊に「虚無を感じる―東京に移住して」の題名で発表している。

20 張赫宙 「私の小説勉強」(「文芸」、一九三九年一月) 一四五頁

21 板垣直子 『事变下の文学』(第一書房、一九四一年四月)

22 「二・二六事件」について『日本史大辞典』(第五卷)(平凡社、一九九三年一月)を参照してまとめる。

一九三六年（昭和十一年）二月二六日から二九日に、日本において陸

軍皇道派青年将校ら二二名が一四八三名の兵を率いて起こしたクーデター。事件後しばらくは「不祥事件」「帝都不祥事件」とも呼ばれていた。皇道派青年将校は北輝一に接近、昭和維新の実現をはかり、武力による国家改造を計画、真崎勘三郎教育総監罷免、相沢事件など統制派の台頭に反発し、皇道派の拠点であった第一師団の満洲派遣を機に蜂起を決意。斎藤実内大臣、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎教育総監を殺害し、鈴木貫太郎待從長に重傷を負わせ、陸軍省、参謀本部、国会、首相官邸などを占拠。陸軍首脳に国家改造を要請した。陸軍首脳は戒厳令をしたが、海軍、財界がクーデターに反対であることをみて弾圧に転換、反乱軍の規定も〈決起〉〈占拠〉〈騒擾〉〈反乱〉と四転。二九日反乱軍を鎮圧。首謀者や理論的指導者の北輝一らを死刑。皇道派関係者を大量に処分、統制派が実権を掌握、岡田啓介内閣は倒れ、軍の政治的発言権が強化された。

23 貴司山治「創刊の挨拶」（『文学案内』第一巻一号、一九三五年七月）

24 前掲「貴司山治『日記』一九三六年（昭和十一年）（三）」三六―六九頁

25 前掲「貴司山治『日記』一九三六年（昭和十一年）（三）」

二月二六日 午後出社。皆外出してだれもゐないので、曇り空のいやな寒い外界をみながら、机上の用たしをしてゐると、丸山がかへってきて、何でもないことのやうに、次ぎの内閣はどういふことになるでせうねーといふやうな話を持ち出す。私は最初は岡田首相がピストルでうたれたのかな、と直感した。このごろの大臣はやめるよりもうち殺される方が早いので。ところが丸山はまるで冗談のやうに「あんた何も知らないので、斎藤、牧野、岡田、渡辺、後藤、高橋、川島―みんな今朝一齊に

やられてしまったですよ」

そこへ小野が外からかへってきて、事件を面白そうにしゃべる。われわれは東京に住んで、こういふことに近頃慣れつこになつて驚かなくなつてしまつたが、もう少し事の本質に対して敏感にならなければいけないのだ。（中略）文学案内では行動主義文学再建座談会の中にファシズム攻撃の部分が大部分ある。しかしこれはよからうといふことにしておき、その代りソヴェト文学現状総覧は当分引っこめることにきめる。

二月二七日 戒厳司令官の告示のやうなものが出て、「赤系分子などの妄動を未然に」云々の文句がある。もし市街戦が始まれば、その前にいはゆる「赤系分子」が「保護検束」ぐらゐられるかもしれない。文学案内杜へは東京憲兵隊の特高が時々来てゐる。今は雑誌の四月号の編輯最中だ。だけれど、そういふことで持つて行かれては仕事に差支へるので、明日中、様子を見るため、丸山と自分の二人が事務所に出ず自宅へもかへらないことにして、夜に入つて事務所を引き払ふ。

26 前掲「貴司山治『日記』一九三六年（昭和十一年）（三）」

七月二四日 張赫宙君の歓迎会をひらく。発企人なので、午後から出かける。（中略）七時半から十時半まで銀座通り日本屋といふレストランで張赫宙君の会。四十人近くくる。宇野浩二などくる。二三日間のつき合ひで張といふ作家がなかなか大人じみた着実な男で、相当な宣伝屋でもあることを感ずる。但しこれは悪口ではない。自分の知つてゐる朝鮮人にはこう人間が殆どなく、かなり信用してゐた金親済でもやはりわれわれの仕事についてもまづ自己を守るといふ小汚い態度を朝から晩まで露出して、他の社員にきらはれ、私は最近朝鮮人に凡そ失望しかけてゐる。そういふ時に張赫宙が大邸からやつてきたのだが、この人にもやはり朝

鮮人特有の勘定高い所はある。そしていつてゐることに裏と表がある。

しかし、まだこの人なら信用して物をたのめると思ふ。何故なれば勘定は細かいが、きつちりしてゐて、物事に凡帳面で、排他的でない。金文軒といふ名の男が「星座」八月号で口汚く張を罵つてゐるのをみて不愉快に思つたが、この種の朝鮮人が一番鼻もちがならぬ。

けふの会にも前から名を知つてゐる金子和といふ男が来てゐたが、書く物でみると、一応ちゃんと物が判つてゐるやうだ。しかし自分をつかまへて、今夜の会を朝鮮芸術座後援会にそまゝ転化するやうに託してくれなどと持ち込むところを見ると、たよらない。そんなことはできないと、ことはつてしまふ。」

27 『編集室ルポ』（『文学案内』第二巻七号、一九三六年七月）一五二頁

28 前掲『言論統制文献資料集成』第一一巻、七五頁

29 張赫宙「理論の貧困」（『文学案内』第二巻二二号、一九三六年二月）一〇二頁

30 『善悪の彼岸』（『二一チエ全集』第一〇巻、理想社、一九六七年六月）一二七頁

※ 本論における「深淵の人」の引用は全て初出「文学案内」（一九三六年九月）掲載のものによつた。

（九州大学比較社会文化学府博士後期課程二年）